



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	リサーチ・アシスタント(RA)成果報告書
Citation	研究論集, 24, 263 (左) -276 (左)
Issue Date	2025-01-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94043
Type	other
File Information	17_rjgshhs_24_p263-276_l.pdf



リサーチ・アシスタント(RA)成果報告書

文学研究院研究プロジェクト「人文学と社会」について

文学研究院研究プロジェクト「人文学と社会」は、博士後期課程の学生をリサーチ・アシスタントとして採用することにより、学生を経済的に支援し、博士論文の早期提出および内容の充実を図るとともに、学生の研究環境の充実および若手研究者としての研究遂行能力を養成することを目的としています。

文学院には、令和5年度、183名の博士後期課程の大学院生が在籍し、そのうち12名がリサーチ・アシスタントとして独自のテーマについて研究を進めてきました。その研究テーマ一覧と、1年間の研究成果の概要報告を、『研究論集』の資料として掲載しています。

研究テーマ一覧

令和5年度

氏 名	研 究 テ ー マ	頁
芦 非 煙	北海道道央地域における外来種ニホンテンと在来種エゾクロテンの競合に関する保全生態学的研究	265
翁 康 健	ツーリストと地域住民の協働による地域発展 —プーケットのベジタリアン・フェスティバルを事例に—	266
昆 野 照 美	塗り絵行動による気分改善の可能性 —感情に影響を及ぼす絵画的表現素の検討	267
長 坂 祥 悟	フランス革命期における「共感」概念の系譜 — グルーシー、カバニス、ピランのスマス受容 —	268
沈 嘉 琳	Raymond Chandler <i>The Long Goodbye</i> と村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』の比較研究	269
莫 寒	反朱子学と朱子学 — 懷徳堂を中心に	270
野 口 飛 香 留	南北朝期の天皇家と陰陽師	271
路 勝 楠	元弘相傳本『五行大義』引『説文解字』考	272
菊 谷 敬 子	癒し感情を喚起させる色の心理的及び生理的反応の効果	273
上 村 正 之	「19世紀前半における文学上のウクライナ・コサックとナショナリズムの関係」	274
張 旭 穎	聴取者にとっての演奏表現の芸術性：音楽訓練経験の影響	275
崔 文 婕	大和屋竺の「恐怖映画」論 — 脚本作を中心に —	276

研究成果の概要

研究テーマ	北海道道央地域における外来種ニホンテンと在来種エゾクロテンの競合に関する保全生態学的研究
R A 氏 名	ろ 芦 ひ 非 えん 煙
専攻・研究室・学年	人間科学専攻 地域科学社会生態研究室 博士後期課程3年
指導教員氏名	池 田 透
研究成果の概要	
在来種エゾクロテン (<i>Martes zibellina brachyura</i>) は日本の中で北海道にのみ生息し、環境省のレッドデータブックにおいて「準絶滅危惧」に指定されている貴重な野生動物である。ニホンテン (<i>Martes melampus melampus</i>) はイタチ科テン属に分類される哺乳類で、現在国内由来の外来種として北海道や佐渡島に生息している。外来種ニホンテンの今の生息分布に関する記録はすべて石狩低地帯の南西側の地域で、在来種エゾクロテンの記録はすべて北東側の地域であった。エゾクロテンの分布変化の記録から見ると、外来種ニホンテンの影響が大きいことが予想され、本研究においてはその原因を明らかにするために、在来種エゾクロテンと外来種ニホンテンの関係性を明らかにすることを目的として調査する。そこで、本研究では北海道道央地域における外来種ニホンテンと在来種エゾクロテンの競合について保全生態学的見地から具体的に分析する。 研究計画については、自動撮影カメラを用いる調査と冬季の足跡による痕跡調査などで、二種のテンのデータを収集する。これまでの生息記録を集約すると、野幌森林公園と石狩地域の海岸林では、在来種エゾクロテンと外来種ニホンテンの両種が生息している可能性があり、種間関係を明らかにするには最適な調査地と考えられる。自動撮影カメラを用いて、この二つの調査地を重点として調査する。外来種ニホンテンは森林環境に依存するといわれることから、支笏湖周辺の林地を調査した。撮影した写真を分類し、自動撮影カメラの設置場所ごとにテンの出現頻度を整理した。撮影内容から、調査地ごとのテン類を整理して、月別、季節別や時間帯別など具体的に解析を行った。GISなどのソフトを使って外来種ニホンテンの侵入可能な地域を分析し、推測した。MAXENTモデルを使用して、テンの生息地の適合性を評価および比較した。結果によって在来種エゾクロテンと外来種ニホンテンは時間的、または空間的競合の可能性が大きい。	

研究テーマ	ツーリストと地域住民の協働による地域発展 —プーケットのベジタリアン・フェスティバルを事例に—
R A 氏 名	おう こん けん 翁 康 健
専攻・研究室・学年	人間科学専攻 社会学研究室 博士後期課程3年
指導教員氏名	櫻 井 義 秀
研究成果の概要	
本研究は地域社会の発展に焦点を当て、祭りを通じて地域住民とツーリストが協働する、つまり地域共同体と外部とのつながりが同時に発展する可能性を明らかにすることを目的とする。本研究ではタイ国のプーケット県におけるベジタリアン・フェスティバルを調査事例とする。 タイでは、毎年中国旧暦の9月1日から9日まで、菜食をする行事が開催される。この行事は華人の祭祀に由来しており、中国語では「九皇齋」または「九皇勝会」と呼ばれている。19世紀前半に導入されたこの行事は、プーケット県を中心とするタイ南部で広く受け入れられ、現在も宗教的な儀礼の形式を保ちつつ継承されている。 プーケットのベジタリアン・フェスティバルは、廟（華人宗教施設）、マーソン（霊媒師）、地域住民による運営、企業・行政からの支援とサポート、そして観光客、レストラン・屋台・ホテルといった様々な関係者の協力によって成り立っている。このイベントはプーケット全域の多くの廟で開催され、大規模な廟と小規模な廟がそれぞれ異なる役割を果たしているという特徴がある。有名で大規模な廟は主に観光目的で観光客に開放され、これによって外の世界との繋がりが生まれる。一方で、村にある小規模な廟は主に地元住民のために存在している。なお、地域住民の人間関係は、従来の地縁や血縁に基づいた関係とは異なり、自身で能動的に選択することができる。 祭りを通じたプーケットの地域発展の特徴は、異なるタイプの廟の存在が、ツーリストと地域住民の両方のニーズを満たすことができる。このようなアプローチにより、地域の活性化に寄与することが期待される。 今回は祭りという特別な期間中におけるプーケットの町興しを考察したが、日常の場においても観光客と地域住民の協働を促進する取り組みが重要である。それへの調査研究を今後の課題とする。	

研究テーマ	塗り絵行動による気分改善の可能性 —感情に影響を及ぼす絵画的表現素の検討
R A 氏 名	こん の て る み 昆 野 照 美
専攻・研究室・学年	人間科学専攻 心理学研究室 博士後期課程3年
指導教員氏名	川 端 康 弘
研究成果の概要	
絵画療法には、参加者の描く絵の形や色を分析する手法が複数ある。それらにより、参加者は自身の心内状況の把握や気分転換を行うことが可能である。一方、着色を主とする塗り絵の研究では、抽象図柄（マンダラ塗り絵）を使用してネガティブ感情の低減は明らかになっているが（Curry. & Kasser, 2015）、ポジティブ感情への効果について一部しか明らかになっていない（Forkosh, 2017）。過去の研究では具象図柄を用いた塗り絵の定量的な実験が少なく、ポジティブな効果も明らかにされていない。絵画療法において形と色が重要な要素であるため、本研究では塗り絵の着色や図柄が人に与えるポジティブな効果を明らかにすることを目指す。塗り絵への着色作業が気分や体調、感情へポジティブな影響を与えることを報告し、（Konno & Kawabata, 2022）、着色によるポジティブな影響が明らかになったため、本研究では、着色の色グループ（暖色系、寒色系、色制限なし）の違いが、人の感情状態である悲しい（楽しい）状態へ異なる影響を与えるかについて気分と体調、感情語に関して検討した。暖色系とは赤から黄色にかけての暖かさを感じる色である。寒色系とは、青系の冷たさを感じる色である。悲しい条件では、グループ間において有意さは認められなかった。楽しい条件については、気分について有意傾向が認められた。色グループ（暖色系、寒色系、色制限なし）×感情語（12語の形容詞）について検討を行った。楽しい条件では、明るい、うれしい、リラックス、気分が軽い、激しい、力強い、緊張している、怒っているについてグループ間で有意差が見られた。リラックスに関しては、暖色系と寒色系が色制限なしと比較してより平均評価が高くなった。対して、激しい、力強い、緊張するについては色制限なしが他の二グループと比較して、平均評価が高かった。色制限なしで色を塗ると緊張している、激しいなどの比較的ネガティブな感情が高まった。一方、寒色系による着色は、激しい、緊張しているについて平均評価が減少し、それらの感情が抑制されることが明らかになった。今後の課題は、悲しい（楽しい）状態が、着色における色選択に及ぼす影響を引き続き検討する予定である。	

研究テーマ	フランス革命期における「共感」概念の系譜 —— グルーシー、カバニス、ビランのスミス受容 ——
R A 氏 名	なが さか しょう ご 長 坂 祥 悟
専攻・研究室・学年	人文学専攻 哲学倫理学研究室 博士後期課程2年
指導教員氏名	村 松 正 隆
研究成果の概要	
哲学史上長らく自然学的色彩を帯びた概念であった「共感 (sympathy / sympathie)」を道徳論の概念へ押し上げるのに貢献したのが A. スミスであるのは論を俟たない。彼の道徳論と「共感」概念は同時期のフランス啓蒙思想においても脚光を浴びた。ところが実際は、フランス啓蒙思想においてスミスの「共感」並びに彼の道徳論は必ずしも忠実に受容されたのではない。しかし、この事はこれまで深く探索されることがほとんどなかった。 そこで本研究は、革命期フランスの啓蒙思想におけるスミスの「共感」の受容（あるいは変容）を、フランス革命期の三人の哲学者—スミスの『道徳感情論』を仏訳したソフィー・ド・グルーシー（コンドルセ夫人）、「共感」概念を生命現象と道徳理解の根幹に据えて当時の思想界に大きな影響を与えたカバニス、彼らの影響を受け、「共感」を自身の道徳哲学の中心概念に据えたメヌ・ド・ビラン—のテキストから浮き彫りにする。本研究が目指すのは、彼らの間にスミスの「共感」の受容（変容）史の系譜を描出することである。加えて本研究では「共感」に基づく彼らの道徳論を知的能力の「陶冶 (culture)」として特徴づけることにも試みる。 上記研究の成果として次の事が挙げられる。1) グルーシーのスミス受容は一種の誤読と批判されることもあったが、しかし実際には、共感を巡る彼女の理論はスミスの共感論に触発されつつ、感覚主義的経験論から再構築された彼女独特の理論と評価できる。2) さらにこの彼女の理論が、カバニスにおいてスミスのな道徳論的共感と生理学的（自然学的）共感とが合流する土壌を醸成したと評価できる。この結果、「共感」は革命期フランス啓蒙において人間の感覚的自然本性と道徳性の基盤双方を理解する概念とし理解されるのだ。3) 上述の二点は、カバニスの共感概念の影響を受けたビランの共感概念に経験論的要素とルネサンス的要素が認められるとする先行研究とも符合する。むしろ本研究は、ビランの「共感」におけるこれらの要素を思想史的観点から確証することができた。	

研究テーマ	Raymond Chandler <i>The Long Goodbye</i> と 村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』の比較 研究
R A 氏 名	しん か りん 沈 嘉 琳
専攻・研究室・学年	人文学専攻 映像・現代文化論研究室 博士後期課程1年
指導教員氏名	中 村 三 春
研究成果の概要	
『羊をめぐる冒険』(1982)は、レイモンド・チャンドラーの <i>The Long Goodbye</i> (1953) を徹底的に下敷きにして作られた作品であると村上春樹はインタビューで明言した。『羊をめぐる冒険』あるいは、村上作品一般と <i>The Long Goodbye</i> との比較研究が盛んに行われてきたが、『羊をめぐる冒険』と深く関連する『ダンス・ダンス・ダンス』(1988)は看過されている。本研究は『ダンス・ダンス・ダンス』の主人公「僕」の人物像を中心に考察し、村上春樹の創作動機を踏まえつつ、<i>The Long Goodbye</i> を代表とするレイモンド・チャンドラーの作品と『ダンス・ダンス・ダンス』との関連性を明らかにするのを目的とした。 <i>The Long Goodbye</i> 及びレイモンド・チャンドラー作品全般に関する論述を参照にし、主人公フィリップ・マーロウの人物像には、社会活動の中で個人的なルールとモラルを保ち、社会性と単独性の均衡を巧みに取る特徴があることが明らかになった。そういった、マーロウの人物像の特徴は、『ダンス・ダンス・ダンス』の主人公「僕」の人物像との関連性に着目し、マーロウと関連する人物像の導入は『ダンス・ダンス・ダンス』の物語の展開にいかなる影響を与えたのかに焦点を当て、分析と研究を展開した。 研究成果としては、『羊をめぐる冒険』と <i>The Long Goodbye</i> のどちらにおいても、主人公である「僕」とマーロウが友人を探す形で「宝探し」の物語的類型が形成される。それに対し、<i>The Long Goodbye</i> の主人公マーロウの人物像の特徴は『ダンス・ダンス・ダンス』の「僕」に反映される。ヴァルター・ベンヤミンの提唱した（遊歩者）<i>Flâneur</i> であるマーロウと同様、「僕」は東京、札幌、ハワイの三つの場所を転々と回し、それぞれの場所で、社会性と単独性の調和を取る仕方を模索する。作品における「僕」の移動は「僕」の人物像の描写と深く関連し、『ダンス・ダンス・ダンス』の物語の展開の核となる部分を成す。また、類似となる二人の主人公の人物像の特徴は、それぞれの作品が作られた時代の社会状況と結びつけられることも、研究を通して明確となった。 今後は、英語版の原作に対する考察も行い、レイモンド・チャンドラーの作品が全体的に一貫して如何に村上作品に影響を与えてきたかについて、研究をさらに深めていく予定です。	

研究テーマ	反朱子学と朱子学 ― 懷徳堂を中心に
R A 氏 名	ばく 莫 かん 寒
専攻・研究室・学年	人文学専攻 中国文化論研究室 博士後期課程2年
指導教員氏名	近 藤 浩 之
研究成果の概要	
研究目的・内容 本研究では、反朱子学の荻生徂徠の『論語徴』と朱子学の懷徳堂の『非物篇』・『非徴』とを精読し、特に学而篇についての特徴をまとめる。学而篇は『論語』の首篇であり、最も重要な篇目である。儒教の根本的な考え方を説き、入道の門である。荻生徂徠の『論語徴』も朱子学に対する反論の根本も学而篇から展開している。そこで、『論語徴』を論駁する懷徳堂の『非物篇』・『非徴』を研究対象として、最初にそれらの文献を精緻に読解する基礎研究を行い、その後に朱子学への反論とそれへの再反論との特徴をまとめる。 研究計画 (1)具体的な研究内容としては、まず『非物篇』・『非徴』の基礎研究である。『非物篇』・『非徴』の学而篇の訳注を作成する。(2)訳注を作成する時、懷徳堂が朱子学をどのように受容したかを明らかにし、論文を執筆する。(3)『論語』の曾子三省章を中心に、具体的に『非物篇』・『非徴』の解釈上の特徴をまとめ、論文を完成する。 研究成果 研究計画に従い、日本中国学会で口頭発表した、テーマは『論語』曾子三省章の朱注に関する再検討である。そして、「江戸中後期の『論語』解釈 ― 曾子三省章を中心に ―」をタイトルとし、論文を執筆し、今投稿中である。	

研究テーマ	南北朝期の天皇家と陰陽師
R A 氏 名	の ぐち ひ かる 野 口 飛香留
専攻・研究室・学年	歴史地域文化学専攻 日本史学研究室 博士後期課程3年
指導教員氏名	橋 本 雄
研究成果の概要	
本研究の目的は、天皇家との関係を切り口にして、南北朝期における陰陽師の歴史的展開を再検討し、その実像を描き直すことにある。具体的な研究計画としては、南北朝期に乱立していた有力な陰陽道家たち（賀茂氏・安倍氏の諸流）の中から、陰陽師の安倍有世が頭角を現し突出してゆく過程とその要因を、天皇との関係という視角を取り入れつつ再考することを目標とした。 上記を踏まえた本研究の成果は、以下の通りである。従来の研究では、安倍有世の台頭の要因は、当時の室町幕府將軍足利義満と親密な関係を結び、義満の後援によって陰陽師としては前例の無い身分上昇を果たした点に専ら求められてきた。そして義満と有世が蜜月を深め、有世が「義満専属の祈禱者」となってゆく一方で、義満と対立していた天皇と有世との関係は希薄化してゆくと理解されてきた。しかし、近年の公武関係史研究の最新の知見や、当時の古文書・古記録の読み直しを踏まえた結果、次の結論に達した。 ①安倍有世は、実際には天皇・義満の双方を陰陽師として護持し、両者との間に緊密な関係を維持し続けており、「義満専属の祈禱者」ではなく「公武の護持者」として再評価すべきであること。 ②有世は天皇の護持を担う対価として、天皇家にまつわる所領の支配を認可されており、こうした経済基盤の確保が、その後の有世の子孫たちの繁栄に繋がっていったこと。 ③そうした有世による所領支配の実効性が、義満を長とする室町幕府の庇護によって保障されていたこと。その背景には、足利將軍家が他の有力武士に対する優越性を確保するため、天皇の推戴を必要不可欠としていたという事情があり、義満は所領を介した天皇と有世との主従関係を維持することで、有世に天皇の身命の護持を担わせ続ける狙いがあったと推定されること。 ④以上から有世の台頭の本質的要因は、単に武家との親密な関係のみに留まらず、公武双方との緊密な関係を確立したことに求めるべきであること。 以上の知見は、本年度の北大史学会大会において報告した。既に成稿を済ませ、現在は学外の査読誌への投稿準備の段階にある。	

研究テーマ	元弘相傳本『五行大義』引『説文解字』考
R A 氏 名	ろ しょう なん 路 勝 楠
専攻・研究室・学年	人文学専攻 中国文化論研究室 博士後期課程3年
指導教員氏名	近 藤 浩 之
研究成果の概要	
本研究は元弘相傳本『五行大義』背記（以下「背記」と稱する。背記とは、紙背の注釋のことである。）における『説文解字』（以下『説文』と稱する）引用の有様を明らかにすることを目的とする。 研究計画は以下の通りである： ①「説文」と「許慎」というキーワードを抽出し、これらの語句周辺の文脈を確認することで、『説文』に関連する引用と考えられる記述を収集する。収集したものをデータ化する。 ②データ化した内容を大徐本『説文』と比較・分析を行う。 ③データ化した内容を『太平御覽』（以下『御覽』と稱する）や『東宮切韻』等の関連文獻と比較・分析を行う。 ④上記のデータ、比較・分析の結果に基づき、背記における『説文』引用の全体像を明らかにする。 抽出した全八十一例の記述を三つのカテゴリに分類し、詳細な分析を行い、以下の點が明らかになった： ①一つは今まで『説文』からの引用と思われてきた二十例。大徐本『説文』・『御覽』と比較することで、背記における『説文』引用文のほとんどが『御覽』による孫引きであることが明らかになった。 ②もう一つは『五行大義』の研究者である中村璋八が背記からまとめた佚書である『東宮切韻』の内容における『説文』の関連記述。これら五十五例は『東宮切韻』による孫引きであるが、一定の研究価値がある。背記と『説文』と、『東宮切韻』に収録された『説文』の記述とされるものとを比較・検討し、中村の表記のズレや不正確な箇所を訂正し、疑問が残る内容に對して考察した。 ③最後は上記以外に他の文獻からの孫引きであると明記した六例。こちらは一例を除いて全てが『御覽』の孫引きであることがわかった。 要するに、背記における『説文』関連の記述は、『東宮切韻』の孫引き以外、ごくわずかの例外（一例のみ）を除いて全てが『御覽』からの孫引きであることがわかったのである。『御覽』が日本で盛んに利用されていた状況を示唆している。 以上の成果をもとに、「元弘相傳本『五行大義』引『説文解字』考」の博士論文の第四章に位置づけた。本研究は背記の記述をデータ化することにより、今後の関連研究における利便性の向上にも寄与することが期待される。	

研究テーマ	癒し感情を喚起させる色の心理的及び生理的 反応の効果
R A 氏 名	きく や たか こ 菊 谷 敬 子
専攻・研究室・学年	人間システム科学専攻 心理学研究室 博士後期課程3年
指導教員氏名	川 端 康 弘
研究成果の概要	
【研究の目的】 ストレス社会やポストコロナ社会の現在においても、我々は心身的・社会的なストレスに加え、経済的な困窮等によってもストレスを受けている。これらのストレスに対して、ストレス軽減の一助になるのが、心身の両方向からの回復に期待できる「癒し感情」である。本研究は癒し感情に焦点を当て、癒される単色の範囲とその特徴を研究する。 【研究計画】 初めに、ストレス時における色彩活用に関する web 調査を実施し、次に、6つの癒しの側面を用いた単色評価実験を行う計画である。 【研究成果】 日常生活の中でストレスを感じている時に、どのように色彩が活用されているかについて意識調査を行った。その結果、ストレス時に色彩を活用している機会は少なかったことが判明した。しかし、ストレス時に色彩を活用している実験参加者は緑や青等の自然を連想させ、癒しと関連しやすい色（Hemphill, 1996; Naz et al., 2004）や、赤・オレンジ・白等の明度が明るく、彩度が鮮やかな色で肯定的な感情を喚起させやすい単色を挙げ（Suk et al., 2010）、ストレス解消に色彩を活用していた。実験参加者の中には、黒を用いるという興味深い報告があった。黒には悪いイメージが連想しやすく（松本, 1926）、明度が低く彩度が低い色は否定的な感情を喚起させやすい。その代表的な色が黒である。しかし、この黒をストレスに対抗できる色という文脈に用いることによって、ストレスの軽減の一助になることが示唆された。このことは癒しを構成する6つの癒し要素を用いた単色の評価実験からも支持された。癒し要素の6つのうち4つの癒し要素で黒も癒される単色であると評価された。これはストレス時の色彩利用の意識調査で黒を利用すると回答しなかった実験参加者も含まれた。文脈効果によって方向づけることにより、今までは測定が難しかった色彩の新たな一面を引き出せる可能性が見出された。有彩色では、癒しの要素によって癒される単色の分布が変化した。つまり、どのように癒されるかによって、選ばれる単色も異なるようだ。これは、どのように癒されたいかによって、選択する単色も変えることで効果的な癒し感情が色彩によって得られることを示唆している。	

研究テーマ	「19世紀前半における文学上のウクライナ・コサックとナショナリズムの関係」
R A 氏名	うえ むら まさ ゆき 上 村 正 之
専攻・研究室・学年	人文学専攻 スラブ・ユーラシア学講座 スラブ・ユーラシア学研究室 博士後期課程3年
指導教員氏名	安 達 大 輔
研究成果の概要	
19世紀前半におけるロシアおよびウクライナ文学におけるコサック表象と、ナショナリズムの関係を研究する。コサックとは、ウクライナおよびロシア南部で発生した自営的な武装集団で、ウクライナでは現在に至るまでナショナル・アイデンティティを象徴する存在である。 本研究が扱うナショナリズムとは、のちの時代におけるように必ずしも政治的な意図（統一国家の建設、分離・独立等）をもつものではない。19世紀のロマン主義という思想・芸術潮流において、言語・文化・宗教などを基盤にした、個々のネイションの固有性・自律性を重要視する思想としてのナショナリズムが促進された。ロシア帝国においては、「ナロードノスチ」（民族性・国民性）が文学上の重要概念として認識され、ロシア帝国という共通の空間で、それぞれロシア人・ウクライナ人（当時は小ロシア人と呼ばれ、ウクライナはロシア帝国の一地方であった）の間で「ナロードノスチ」の意識が高まっていた。但し、ウクライナ人の教養階級は、ロシア語を書き言葉とし、首都で活躍の場があったため、ロシアとウクライナの二つの民族意識を持ちえた点で複雑であり、それゆえに研究を必要とする。 具体的な作品として、ニコライ・ゴーゴリ（1809-1852）のロシア語作品『タラス・ブーリバ』（1835/42）と、タラス・シェフチェンコ（1814-1861）のウクライナ語作品『ハイダマキ』（1841）を分析した。両者ともウクライナ出身で、前者はロシア文学の、後者はウクライナ文学の重要な作家／詩人である。両作品共にコサックを、ロシアとは異なるウクライナの「ナロードノスチ」の担いとして描いているが、ゴーゴリはロシアの公式的言説と親和性のある形で、正教徒の英雄的な姿を交えてコサックを描くのに対し、シェフチェンコの場合、扱っている歴史的題材（ロシア軍に鎮圧された農民反乱）や語り手の態度のレベルにおいて、ロシア帝国の、あるいはロシアの批評界の言説に対抗している。	

研究テーマ	聴取者にとっての演奏表現の芸術性： 音楽訓練経験の影響
R A 氏 名	ちょう 張 きょく 旭 えい 穎
専攻・研究室・学年	人間科学専攻 心理学研究室 博士後期課程3年
指導教員氏名	安 達 真由美
研究成果の概要	
西洋クラシックの演奏家は楽譜に記載された音価を微妙に変化させることで、楽曲を芸術的演奏と芸術的ではない演奏とに弾き分けることができるが、一般聴取者には両方とも「芸術的」に聴こえてしまう。その一因として考えられるのは、聴取者の印象が必ずしも「演奏者の表現」に対するものではなく、演奏された「楽曲自体の芸術性」に対するものと考えられる。この仮説を検証するために、音階やアルペジオ（分散和音）といった単純なパターンのみからなる旋律を用いて芸術的逸脱の度合や構造的要因を操作した実験を行った。今年度の研究では、聴取者の音楽経験に焦点を当てて、音楽訓練年数が演奏の全体的テンポや、部分的テンポのゆらぎに対する芸術性評価に影響を与えるかを解明した。 実験では、Finale のチェロ音で作成した 12 長調の音階型旋律（30 音）とアルペジオ型旋律（30 音）を用い、「全体的テンポ」「部分的テンポの操作位置」「部分的テンポの操作範囲」を操作した。実験参加者は学校音楽教育以外の音楽訓練年数により、初心者・中級者・上級者の 3 群に分けられ、各旋律が「どの程度芸術的に聴こえるか」を 0 から 9 までの単極 10 件法で評定した。 その結果、全体的テンポ、部分的テンポの操作位置、操作範囲といったテンポのゆらぎに関するいずれの要因においても、その芸術性評価の傾向に音楽訓練年数の効果は認められなかった。このことは、演奏未経験者の芸術性評価が、クラシック楽曲では演奏表現というよりも楽曲そのものへの印象を反映するのに対し、音階・アルペジオといった単純な音型からなる旋律では、演奏表現自体への評価を反映し、その評価が少なくともアマチュアの演奏経験者と同じ傾向にあることを示唆している。この成果は、原著論文として学術誌に投稿され、現在査読中である。	

研究テーマ	大和屋竺の「恐怖映画」論—脚本作を中心に—
R A 氏 名	さい ぶん しょう 崔 文 婕
専攻・研究室・学年	人文学専攻 映像・現代文化論研究室 博士後期課程3年
指導教員氏名	阿 部 嘉 昭
研究成果の概要	
本研究は日本の映画作家・大和屋竺（1937-1993）の作家性を明らかにすることを目的とする。大和屋は作品数が少ないが、異色な監督作と若松孝二や鈴木清順に提供した脚本作をもって、知る人ぞ知る特異な作家である。その作家性は60年代と70年代という政治的にも芸術的にも過激な時代を背景に、映画自体を「恐怖」とする独特な着眼のもとに、非人間的な現実の表現を目指したことで強化された。ただしこれまでの大和屋研究は断片的なものしかない。本研究は彼の全体的な作家像の定着を目指し、まず歴史背景と大和屋の論説を整理してまとめた。 本研究では、具体的な作品分析と作品比較を通じて、映画がいかにもう一つの現実を表現しているかという映画芸術としての試みと、その表現がいかに「恐怖」を与えるかという大和屋の世界観を整理する。 大和屋竺の「恐怖映画」は、映画観に関する「もう一つの現実」、映像体験の実践に関する「悪夢のような体験」、映画技法に関する「時間」、これら三つの側面を持つ。シュルレアリスムの影響下にあるが、着眼された題材は現実的でもあり、分裂的で交錯する世界認識に基づいた悪夢のような映画が志向されている。これら三つの特性は、大和屋の脚本作にも作家的に一貫している。脚本作で取り上げたのは、大和屋脚本作中の代表作と目される、若松プロダクション期の『処女ゲバゲバ』（若松孝二、1969年）、ピンク映画の『おんな地獄唄 尺八弁天』（渡辺護、1970年）である。無論、『尺八弁天』における時代劇の要素など、監督の発想も映画の重要な構成部分だが、以上の特性はシナリオ段階で決められたものであり、映像も大和屋的に見えてしまう。さらに映像が手に入らない脚本作品も数多く存在する。例えば、『蒼いフィルム 品さだめ』（向井寛監督、1968年公開）、『引き裂かれたブルーフィルム』（梅沢薫監督、1969年公開）は、フィルムというオブジェの運用、映画内映画の設定で、時間をより緻密に攪乱し、シナリオを読むだけでも悪夢に襲われるほどの「恐怖映画」の傑作である。	